

1 アリス・フェル

一貧しき孤児一

郵便馬車の少年は全速力で馬を走らせていた
暗雲が月を隠して 今にも大降りになりそうな気配だ
先へ先へと急いでいると
びっくりするような物音がわたしの耳を打った

まるで風が四方から吹き寄せるように 5
音はどんどん耳元に迫ってくる
馬車の後を追うように
どこまでも付いてくる

ついにわたしは 御者の少年に大声を張り上げた
その声に 彼は馬を止めた 10
しかし 何の泣き声も叫び声も聞こえない
いや それらしき物音は何も聞こえない

少年はふたたび鞭を当て
馬たちは 雨の中を全速力で駆け出した
しかしすぐにまた 突風に乗って泣き声が聞こえ 15
わたしは また馬を止めるように命じた

^{ただ}直ちに道に降り立ったわたしは ^{つぶや}呟いた
「この哀れな泣き声は一体どこから」
そして 気付いたのだ
女の子が独り ^{ひと}馬車の後ろに座っているのではないか 20

「あたしのマントが」とだけ その子は言って
大声で激しく泣いた
無邪気な心臓が今にも破裂しそうである
それから その子は座っていた場所から飛び降りた

「どうしたのかい」 女の子は泣きながら「これ見て」 25
何かが車輪に巻きついているのが見える
庭の案山子にぶら下がっている
雨風に晒されたぼろ切れのようなものだった

車輪のハブとスポークの間に挟まって
簡単には取れなかったが 30

力を合わせて 何とか外した
いや 見るもみすばらしいぼろ切れだ

「お嬢さん どちらへ行くんだね
今夜のような寂しい夜道を」
「ダラムよ」 女の子はぶっきらぼうに答えた 35
「だったら さあ 中にお入り」

皆んながホッとしたのも気づかぬ^げ気に
哀れな女の子は座った途端に
啜り泣き始めたが それはまるで
悲しみが永遠に終わらないとでもいう風だった 40

「お嬢さんはダラムに住んでいるのかな」
女の子は急に泣き止んで
「あたしの名前はアリス・フェルよ
お父さんもお母さんもないの

あたしはダラムの者よ」 45
言った途端に胸がいっぱいになり
女の子は また悲しくなって
ぼろぼろになったマントのことで泣くのであった

馬車は走り続け われわれの旅も終わりに近づいた
^{そば}側に座った女の子は 50
まるで無二の友を無くしたように
どんなに慰めても 泣き止まなかった

^{ていしゃば} 駐車場の^{はたご}旅籠に馬車は急いだ
アリスが悲しむ^{わけ}事情を伝えて
わたしは^{あるじ}主に金を渡し 55
ぼろぼろのマントの代わりを買ってやれと頼んだ

「グレーのダッフルコートを
最高に暖かいものを買ってやってくれ」
幼い孤児アリス・フェルは
翌日は得意^{とくいげ}気に 満面の笑みだった 60

(山中光義訳)